

阿寒国立公園

視察の日程はつぎのとおりであった。

第一日(二十六日) 北見——美幌峠

——和琴半島——砂湯——仁伏——藻琴

山——川湯泊

第二日(二十七日) 川湯——硫黄山

——摩周湖——横断道路——阿寒湖——

温根沼——阿寒湖畔泊

第三日(二十八日) 阿寒湖——帯広

十月二十五日の夜は北見にとまって、
二十六日朝、夜行で着いた金光理事を加
えて協会側の視察員は総勢三人である。

の名のとおり一枚の葉も残さず、大雪の
山々は肩まで真白だった。

まだ平地に雪こそ来ていないが、冬枯
れの景色はどこも同じで、今年は道東の
視察三度とも、早すぎたり、おそすぎた
り、紅葉にはえんがなかったとあきらめ
たが、それが思いがけずクッチャラ湖を
囲む内側はまさに紅葉の盛りであった。
温泉が諸所に湧出するので、一帯に暖かい
うえ、湖を囲む四方の山々が寒気をふせ
ぐ結果になったのである。

それはさておき、美幌峠の大観を申し
むべき休憩所の窓ガラスが、はめてもは
めても全部持ち去られるということであ
った。一メートル半四方くらいの大きな
ガラスが数枚あるので、はずして行けば
結構金になるといふことなのである。番
人を置く以外に防ぐ方法はない。それと
も、いっさいとり払ったままにしておく
のもひとつの方法だろう。このことは売
店の問題についてもいえる。基地になる
ところの設備をじゅうぶんにして、途中
のこまごましたものはいっさいとり払う
というのがどうだろう。

よいお天気と今年の秋の長さとのせい
か、展望台附近には売店がまだ開かれて
いたが、この人たちをとめるような工夫

はできないものかなども考えてみた。

無許可の売店人の弊害の話も出た。法律
的な強固な取締り以外に方法はない。こ
この便所の清潔なものには感心した。水洗
式である。どういう工夫をしてあるのか
と聞いてみると、その上手の泉の水を利
用しているということであったが、これ
はまことに妙案であった。

湖岸に下ると、新しい立派な道路が建
設されつつある。これは阿寒横断道路も
そうだし、洞爺湖畔でもそうだった。道
路のよくなるのは結構なことだが、その
ために湖畔や森林がいためられるのが惜
しい気がする。でぎ上がった結果を見な
いとわからないが、国立公園内の道路施
工は、ただそれが一級国道だからこうす
るといふような杓子定規なことではなく、
もっと風景や森林について細かい配慮が
あつてよいように思う。

また徒らに一級国道としての形態にと
らわれないことが必要で、直線的にのみ
通すことがよいかどうか、また従来の道
路のもつていた森林の中を行くという感
じが失われることがよいかどうか、いろ
いろと問題がある。必ずしも一級国道で
ある必要はないのではないか。

和琴半島の入口には私有地がある。し

だいに温泉ホテルの数がふえることが考
えられるが、国立公園内では私有地とい
えどもやはりある規制が必要である。こ
とに下水の問題については、あらかじめ
浄化方法を考えておかないと、洞爺湖の
ように湖水の水が汚濁する危険がある。
狭いながらも、一種の都市計画が確立さ
れなくてはならない。

ホテルないし旅館も、いたずらに軒数
がふえることよりも、立派な大きなホテ
ルに統合して、周囲の景観とよく似合う
美しいものをつくる必要がある。
そういう指導を国が積極的にしてよいの
ではないだろうか。

和琴半島のなかに、車を入れることは
よくない。入口の駐車場を整備して、半
島内は歩道のみにならないと、樹木もいた
み易い。

クツチャラ湖畔の私有地の問題は、和
琴半島にとどまらない。仁伏附近、また
砂湯附近など今後の研究を要すること
がある。ことに、砂湯附近から仁伏にいた
る間は森林も美しく、湖畔の風景も美し
く静かで、植物学上にも貴重なもの多
いところである。キャンプ、水泳などは
和琴半島附近に限って、この辺の原始的
な景観は残さなくてはならない。

仁伏から、林道が藻琴山の頂上近くま
で通じている。展望台に立つと、右にク
ツチャラ湖とその周囲の山々。正面に斜
里岳、左手に浜小清水の海岸線が見えて
オホーツク海の彼方という。ここにも
新たな道路計画があるという。すでに林
道が通じている以上、あまりバスなどの
通る道を開くべきではないだろう。

しかし、もし一般の乗用車がくるよう
になれば歩道を確保する必要がある。
私は日本の山に、スカイラインとか称し
て、やたらに自動車道路を開くことに賛
成できない。水河で保護されているスイ
スのアルプスなどがあって、日本の山
はいくらでも頂上にドライブ・ウェイを
開くことができる。そこから、上に歩い
て登るところは残されないのである。美
しいところは、人々が自分の脚で登って
静かに楽しめるように残しておくべきで
ある。

この頃、歩け歩け運動が各地におこっ
ている。それならばなおのこと、歩かざ
るを得ない場所を残しておくことが目的
にいつそうかなうことであろう。

川湯には、もう昔日の川湯の面影はな
い。温泉宿がふえ、温泉の使用量がふえ

て、川湯のすがたが失われたのである。
温泉の使用も制限すべきではないのか。

二日目は、硫黄山の視察からはじま
った。雲がたれて、薄日がさしている。斜
里岳もかすんでいる。有名なツツジの群
落の中に、シラカバの樹がいたるところ
に侵入してきている。これを切るべきか
どうか問題になっている。

シラカバが茂れば、それによってその
下のツツジの成育が妨げられるからであ
る。一説には自然にはえてくるものを、
たいしたこともないからそのままにして
おいてよからう、ということのようであ
る。ある区域だけ、実験的に伐採する
ということはどうか。

しかし、硫黄山の土砂くずれは早急に
これが対策をたてなくてはならない。

硫黄山から摩周湖への道も、美しい樹
林の中を通って行く。摩周湖はさすがに
寒々としていた。しかし西のほうから空
が暗れてくるのが見える。中ノ島が二つ
に割れてくずれそうだという話が出た。
中ノ島がなくては、画電点晴を欠くこと
にならう。これも対策が必要である。

摩周湖の南側の展望台のあたりは、イ
カのくさった臭いが強い。無許可の立売

人が、イカを何度も洗った臭い水やゴミ
を、湖側の急な斜面の下に投げ捨てるの
だそうである。ここでいろいろくわしい
実状を聞くことができた。

摩周湖から下るにつれてすっかり晴天
になってきた。横断道路にはいると、地
肌まるだしの急斜面が目につく。これも
緑化が必要不可欠だろう。第一、危険で
喜こんでよいのかどうか、何も知らない
ので分らない。

ペンケ、パンケの展望台は清潔であっ
た。イカを焼くにはどうも閉口だが
便所もよく清潔に保たれていた。

阿寒湖畔で昼食。ここも下水の問題が
あるだろう。パスターミナルは立派であ
るが、ジューク・ボックスの高い音は外
部に洩れないように配慮すべきである。

洞爺湖でも、支笏湖でも、遊覧船内でや
たらに音楽らしからぬ雑音音を、むや
みに高声で放送するのはまことによくな
い。これは規制されなくてはならない。

この頃、札幌市内の連結電車の中でさ
えも音を流しはじめた。最初の頃ほど雑
音がひどくはなくなったようだが、絶え
ず車掌の声で中断されながらなので、大
変聞きづらい。さすがに遊覧船の高声放

送が従らに神経をいら立てるのにたいして、これは神経を休めるためと受けとれるだけさいわいであるが、音質や音の出しかたなど、なお工夫が必要である。しかし、そんならまでしてこの音をたてねばならないのだろうか。アンケートをとってみるのも一案であらう。

オンネ湯まで車を走らせる。この小さく清浄な湖畔に、やたらに旅館を許可すべきではない。旅館群は、国民宿舎が現在あるところに集めるべきである。またこの湖に、舟なども浮かばせるべきでない。このような珠玉のような湖は、それなりに大切に守らなくてはならないのである。

観光は大切なことである。しかし美しい、独特な自然があるからこそ観光の対象となるのである。そのもとの自然を破壊してはなんにもならない。北海道の原始的自然は、ただに北海道の宝であるばかりでなく、日本全体の宝である。そして、それはまた国際的なものにもなり得るのである。客引きのための施設を設けるのもよいだろう。人工的なものをつくるのもよいだろう。しかし、それはこの原始的自然美をそこなわない範囲内で行くべきである。

阿寒湖畔で一泊した後、私たちは帯広行のバスにのった。公園内は途中までは前日通った道であるが、森林が非常に美しい。森林を出はされると公園区域も終つて、広い畑と牧場とがひろがる。足寄

川に沿うこの広々とした田園風景はまことに豊かで美しい。帯広までは長いけれども、一度通る価値のある風景である。しかし私の頭は、自然保護の幾多の難問に思いわずらうことが多かった。

(井手貢夫)